

【110】

氏名	緒方 満 おがた みつる
学位の種類	医学博士
学位記番号	論医博第436号
学位授与の日付	昭和43年5月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	歯髓の生物学的研究、特にその逐年的変化について

論文調査委員 (主査) 教授 堀井五十雄 教授 美濃口 玄 教授 西村秀雄

論文内容の要旨

著者は幼児より成人に至る14屍体よりえた上、下顎骨を研究材料に用い、歯特に歯髓に現われる増令的な生理的变化と病理的な変化とのあいだにどのような相違があるかを追求し、次の結果をえた。

- 1) 歯髓に現われる増令的变化はきわめて早期においても出現し、歯が発育中においても高度の退行性変化像を現わす。
- 2) 歯髓に現われる逐年的変化は、まず最初、歯髓内に線維成分が増殖することである。このような現象は増令的にますます顕著となる。
- 3) さらに歯髓内には象牙質瘤、歯髓灰化等の組織像がみられる。
- 4) 象牙質瘤は主として髓室にあらわれ、顕著な場合には髓室の2/3程度が象牙質瘤で占められるものがある。象牙質瘤は変性した歯髓細胞の周囲にカルシウム塩の沈着をきたしたものである。
- 5) 歯髓灰化現象は血管にそって点在あるいは密集して発現する。
- 6) 増令的退行性変化は前歯では髓角部、次いで根尖部、そして髓室中央部に現われる。臼歯においては根管歯髓から髓室歯髓に波及する。このことは髓腔の形態の相違によるものである。
- 7) 歯髓の逐年的変化は萌出時期の早い歯種ほど早く出現する。
- 8) 全ての歯の歯髓組織には早期より逐年的変化と考えられる退行性変化があらわれる。これは病理的現象と区別すべきでむしろ歯髓の生物学的変化と考えるべきである。

論文審査の結果の要旨

本研究において著者は歯牙および歯周組織に、なんら認むべき病的変化のないばあいにおいても、歯髓組織には逐年的退行性変化の現われることを明らかにしたものである。本論文においては種々の年齢層の諸種の歯牙について歯牙植立のまま脱灰切片標本作製、歯牙および歯周組織の状況に注目しつつ歯髓組織の変化を追究したものであるが、その成績の概要はつぎのごとくである。

1) 歯髓組織に現われる退行性変化は、必ずしも年齢に伴って段階的に現われるとは限らず、咬合機能には参加しているが、なお発育途上の未完成歯にみられることもあり必ずしも逐年的変化と断定できないものであるが、組織学的には歯髓細胞の減少と歯髓の線維化とが主体である。

2) つぎに歯髓組織の逐年的変化として最も著名なものは、歯髓内石灰沈着である。石灰沈着には象牙質瘤形成と単なる歯髓灰化とがあり、前者は主として髓室歯髓に現われ、象牙質小粒の形成およびその癒合によって生ずる象牙質瘤の形成であり、高度な時は髓室の2/3程度がこれで占められることもある。後者は主として根管歯髓に現われ、血管周壁に沿う不定形石灰沈着の形をとる。

3) 逐年的変化の現われる部位は髓腔形態の相違によって異なり、単純な髓腔形態を有する前歯では、髓角、根尖部、髓室中央部の順で、髓腔形態の複雑な臼歯では根管歯髓から髓室歯髓へと変化は進行する。

4) 同一個体でも萌出期の相違によって逐年的変化の現わる時期には著しい差がみられ、第一大臼歯のような場合は他の歯種よりも逐年的変化は高度に現われる。

以上本論文は歯髓における逐年的変化の性質およびその進展状況を明らかにしたもので、口腔解剖学上、歯科臨床上重要な研究である。

本論文は学術上有益であって医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。